

議 事 概 要

【第4回北陸地域連携プラットフォーム 平成26年11月20日(木)】

【メンバー】

○ コンパクトシティは、平成19年から脚光を浴びているとお話でしたが、それ以前には、どのような取り組みが行われてきたのかをお伺いしたいと思います。

また、富山市がコンパクトシティに取り組んでいる一方で、都市・農村交流、山村での交流のようなことが進んでいくと、コンパクトシティと相反する施設の開発が進むといった問題があるのではないかとされています。30年、50年先を見越したときに、コンパクトシティになっていくのも良いのですが、その一方で、周辺地域や、いわゆる消滅する自治体というふうに使われている、集落が荒廃したり、荒地になってしまうのではなく、そういったところの整備についても連帯性を考えながら集約することを考えていかないと、切り離された人々が出てくるのではないかと考えるのですが、そのあたりの考えを教えてくださいと思います。

【講師】

○ 平成14年1月に森市長が市長になっておられます。最初からコンパクトシティと言っていたわけではありませんが、それ以降が森市長の政策ということです。

富山市は、革新系の市長がおられた時期があり、その頃に非常に福祉政策が進みました。全国的にも物凄くきめの細かい福祉政策をやっており、自民党系の市長になってからも続いており、他の地域と比べても手厚いです。介護保険料は他よりも少し高いので、そういった意味では北欧型になっています。そういう素地があったということと、石川県もそうだと思いますけれど、富山の人々は、非常に真面目に仕事をします。自分なりに一生懸命やってくれるところが北陸の良いところで、そういった元々の職員の素地と言いますか、行政の中の文化みたいなところ、その辺がしっかりしているというふうに思います。

もう一つ、歴史的に見ますと、富山市は、昭和20年8月に絨毯爆撃を受けて市街地の99.5%が燃えています。文化的なものも含め、全てを失い、その後、戦災復興区画整理を行っており、その時に城址大通りができています。そういう歴史があるから道路が広くなっており、自転車施策を行えるのは、道路が広いから歩道に歩行スペースと自転車スペースを区切ってあります。そういう歴史的な特性も含めた地域特性、それを富山は活かしているということです。

コンパクトシティの議論の際に必ず出てきますが、日本全体が人口減少時期に入り、どのようにして持続可能になっていくのか、持続性をキープしていくのか、地方都市においてそれぞれの都市がどのようにして持続的であり続けるかということが物凄く大きな課題です。そこで出てきたのが「選択と集中」という言葉であり、それを都市政策に反映したのが、まさにコンパクトシティだと思います。ある意味、平成の大合併もそれ

を目指したものだと思います。税収が比較的強いところと一緒にすることによって、これからの福祉政策、社会保障費が膨らんでくる中で、財政的に持続可能であるために、公共団体がそういう選択をした、それは取りも直さず持続可能性というものを尊重したということだと思います。

それを考える時には、どうしても住むところの選択と集中を行わざるを得ない。我々は地方に住んでいる方々を否定するわけではありません。山村に住んでいても、まちなかに住んでいても同じサービスを提供するというのは無理だと言っているわけです。つまり、機会は均等なのですが、電話一本で5分で救急車が来るとか、除雪も完璧にするとか、そういうことが無理な状況になってきますので、選択と集中をせざるを得ないということです。

ただし、我々は、否定はしていません。説明の中で20年で42%と言いましたが、58%はその外に住んでおられることを肯定しているわけです。機会が均等であって、全ての公共サービスが均等ではないということにならざるを得ない。最低限のところはやらなければいけないというのは事実ですが、時代が豊かであればなかった部分での厳しさというのは当然入ってきています。それも含みおいた上でのコンパクトなまちづくりというふう到我々は思っています。

【メンバー】

集まって住むことが重要だと経済学的にも思いますが、敢えて「ここには住まないでください」という、例えば自然化調整区域のような名前を付けても良いと思いますが、公的機関が強制力を持って住まない地域というものを作ったり、例えば、水源涵養の問題も考えていくと国際問題にも発展していくかと思しますので、そういう重要地というのを公が保有するとか、そういうことが必要になってくると思いますが、どこまで私有財産に対して公的機関は入っていけるのかということを知りたいです。

【講師】

○ 学問的な話になってくると思うのですが、昭和43年に都市計画法というものができ、これは物凄く私権制限をかける法律です。ただし、それは都市計画区域をセットした中での話です。さらに、いわゆる線引き制度、市街化区域、市街化調整区域をセットする場合には、市街化調整区域というものが入りますので、そこについては「できるだけ住まないでください」という方向を示すことができる。一方で、都市計画法と同時に農地法や農振法、自然公園法というものがありますから、全体の中でメッセージをエリアとして提示していったわけです。

他方、コンパクトシティ政策の中で「ここには住まないでください」というのは今のところは全くありません。むしろ、よりベターな選択肢を与えることによって誘導政策を進めていくということです。「こっちへ住むと50万円貰えますよ」とか、「ここまで行くとおでかけ定期券で100円で行けますよ」という誘導政策です。「ここには住んだらだめです」だとか、「ここに住んでください」ということには限界があります。人口が増えている時には、住むところ一杯一杯になっており、次はどこにするかという際、「ここに住んでください」と言うことはできますが、人口が減るときに、そこからいなくなら

ないといけないというのは全くできないわけですから、そうすると「こっちは水は甘いですよ」、「こちらのほうがお得ですよ」、「こっちがベターですよ」、「あなたが年をとった時に豊かな人生を全うするためにはこっちのほうが良いのではないですか」という選択肢を与えることによってコンパクトなまちをつくっていく、多分、そういうことしかできないと思います。

仰るように私権制限はかけにくいと思いますし、今、都市計画法と同じぐらいの私権制限をかけようと思ったら、恐らく無理だと思います。

【メンバー】

- 資料 35 ページのところで、都心地区とそれから公共交通沿線居住推進地区とありますね。これは要するにロンドンであれば、セントラル・ロンドンといいますか観光で知られているロンドンと、ロンドンの中にもグレーター・ロンドンというのがあって、ですから、コンパクトシティというよりも、要するに都市部、セントラル富山と、それから衛星都市、サテライトタウンですかね。それをロンドンでは地下鉄で結んでいますが、富山はライトレールで結んでいる。例えば岩瀬から上滝まで、都心を経て繋いでしまえば、大沢野であれ八尾であれ、そこにサテライトタウンができる。そういうことを考えればロンドンの都市計画の形をとっているのではないかと思います。これは、恐らく森市長という優れた市長がここまで持ってきたのではないかと思いますし、優れた市長がいて、皆が付いていったということではないかと思います。

一番望みたいのは、富山地方鉄道の不二越・上滝線の例えば月岡とか大庄、ここに空港を持っていったらどうだろう、丁度その辺りには何もありません。今の富山空港を廃止して、その辺りに国際空港をという大胆な発想を持ってくると、これはやれるのではないかと思います。今の富山空港は河川敷ということで限界がある。ライトレールのような形で引き込んで国際空港をつくる。富山市、富山県だけではできないことですが、そういう発想も取れるのではないかと思います。

【講師】

- 前半は国土政策の話で、グレーター・ロンドンの話は色々学んでおります。大都市地域の都市問題と地方都市とでは様相が違うということがあり、グレーター・ロンドンというのは、再開発が成功した事例と言われているけれども、ああいう広域的な大都市の問題と富山の問題とでは国土政策的にスタンスが違うような気がしています。富山ですと、農業と製薬業等々の産業がしっかりしています。そういう両方で地域経済が成り立っている状態と、三次産業が殆どという大都市とでは状況が違うのだらうと思っています。

実際、都市計画の考え方、あるいは国土計画法の体系も大都市においては少し違う気がしています。そこは国土政策的に大都市問題と地方都市問題とは分けたほうが良いのかなというのが正直ございます。

空港の話ですけれども、上滝線の増発実験をやっているし、新駅の想定もしつつ、あの辺の活性化を考えています。大庄駅の辺りも含めて駅前にパーク・アンド・ライド

の駐車場を整備したりもしていますが、空港となりますと、運輸政策にかかってきますけれども、まさに国土政策です。これは私どもからはなかなか発言できませんので、それが良いということであれば、むしろ、経済界も含めて財界のほうから盛り上げていただくこととなります。

【メンバー】

- 行政サイドと財政、それから将来のあり方という意味では、コンパクトシティというのは魅力があり、持続可能という意味でもベターな選択というふうに感じます。

ただ、大都市と地方、その決定的な違いというものにどう正面から向き合って地域を維持していくかという点で、限界集落化しつつある過疎地の活かし方と、たたみ方というのが非常に大きな行政上の問題になってくると思います。そこでコンパクトシティという選択だけでなく、暮らし向きの豊かさ以上に生き方の豊かさというのが必要になってくると思います。人がいなくても中山間地に生きること、そこで生きていくことの満足感、そういったものが人生のたたみ方と地域のたたみ方というのに繋がっていくと思いますので、こういったものも含めると、都市政策や行政効率ではなく、総合政策として社会的に見ていく必要があるというふうに思います。

そういう意味では、コンパクトシティという非常に実効性の高いものを進めておられるがゆえに、農村部や中山間地の活かし方、そういったことの解を出していただき、全国津々浦々の諸課題に対する提案型になっていただきたいと思います。

もう一つ、このコンパクトシティを実行するに当たって、県と市、周辺の市部の連携、それから市民連携、どういった市民の声がこのコンパクトシティの中に吸い上げられているかについてお伺いします。

【講師】

- 地方での生き方の豊かさというのはよく分かります。まちなかのコミュニティも必要ですが、それ以上に地方のコミュニティというのは本当に日本に残すべき文化と直結しているというのは仰るとおりで、私もそういうふうに思います。

ですから、社会政策的にというのは仰るとおりで、これは行政がどこまでそういった問題にコミットできるかというチャレンジになってきます。市長もそのへんは分かっていたいており、そういう議論をすることもありますが、行政が施策、選択として手を入れることができる範囲、改善できる範囲というのはオールマイティではありませんので、そのところが中々完全には手を出せていないところです。

文化行政として、「良いものがあるのでこれを大事にしよう」というものについては残したいと思っていますし、そういう政策も打ちます。

それ以上につらいのは、地域の産業の構造が本当に変わってきている。もう専業農家は殆どおられません。殆ど全てに近い状態で兼業農家です。47都道府県の中で米しか作っていない農家が最も多いのが富山県です。兼業でも、米なら手を抜けば年間6日か7日農業をやるだけでできる、ですから米なのです。米のことだけなら買ったほうが良いという状態なのですが、先祖伝来の土地でぺんぺん草を生やしているわけにいかないという、ぎりぎりのところでやっている状態です。

そういうところで、果たしてその限界集落的なところも含めて、どういうふうに産業構造を持っていくのかという問題で、例えば、山田村ではエゴマに注目しまして、製菓会社と連携しながら、余剰の温泉水を使った植物工場で作っています。そういう施策を補助も入れながらやっています。これは未来都市の政策の一つですけれども、そういうことをやって旧山田村の地域を支えたいと思っています。

一方では、山田村に物凄く良い棚田があるのですが、その景観を守れるのかというと、これは市でやるのはかなりきつい。やれることとやれないことがあります。守るべき地域の産業をどうするかということに先に取り組み、そこには地域の方々がおられるので、文化を伝承し、守っていただろうと思いますので、そういうところまでつくっていくのが我々として重要ななと思います。

市民との対話ということでは、例えばライトレールとする際にも、市長は1日4回市民との会合で話をしたということもありますし、全部で400回程度の会合を持っているんです。市民との会話、対話も重要です。富山市はコンパクトシティと言っていますけれども、行政センターはもちろん、地区センターというものもあり、行政サービスの窓口が79か所あり、小学校の校区にそれぞれ一つある。これは恐らく全国で最も地域の行政を手厚くしている一つの例だと思います。そういうところが地域の窓口になって、地域の御要望を集約しており、地域からの要望、声を常に吸い上げていますし、私のところにも市民の方が来られます。NPO活動は若干低調かなと思いますが、富山の特性としてそういう形で通っており、地域の実情に合った市民との交わりを行っているつもりです。

【メンバー】

- 居住に関しての集中化という話がありましたが、もう一つ仕事の間としての集中化といえますか、富山の場合はものづくりの企業が多く、工場が郊外に出て、それとともに本社管理部門も外に出ている場合が結構あると思います。その辺をまちの中に集めようというような方策は考えていらっしゃいますか。

【講師】

- 災害に強い富山というイメージが先行してしまっていて、中越地震があったり、能登の地震があったりする中で、この何十年かは安定しています。ただし、歴史的に見ますと1858年（安政5年）の飛越地震で鳶山が深層崩壊し、天然ダムを形成しており、2億m³の土砂があるのですが、それが2回崩れて、土砂が富山城まで来ています。また、呉羽山というのは逆断層でできた山で、次はあれが動くだろうと言われています。富山でも災害はあるのですが、この瞬間、今は富山が色々なことで注目されていますし、中小企業に対する低金利の支援もしています。

今、富山市が工業団地を造成して売っていますが、インターチェンジ付近も含めて全部売れました。なかなか売れなかった八尾の中核工業団地も全部売れ、新たな工業用地を見つけようとしたのですが、農地転用ががんじがらめになっています。環境未来都市の枠組みで、規制緩和も含めて大分取り組みましたがだめでした。岩盤規制の最たるもの

が農地転用だと思えます。

ものづくりの集約化については、今それを行おうとしていまして、インターチェンジの近く、例えば富山西インター付近に工業フレームを張り付けて、都市計画法の手続きを踏んだ上で農地転用するという正面からの取組みを行っています。ものづくりという意味では、工場はまちなかになくてもいいのかなと思っていまして、ある程度郊外にまとまって工業団地があって、本社や第3次産業的などところはまちなかに行っていただくというのが望ましいと思えています。そういう構図がおのずととれているのかなというふうに思っております。

産業は生命線だと思っており、コンパクトなまちづくりで有名になっていますが、市長を見ていて、一番力を入れているのは産業振興に対する非常に強い思いです。産業があってこそ雇用もしっかりして、地域税収も取れるというのがありましようから、地域の経済などとともに歩んでいるという意識が強いのではないかと思っています。

【メンバー】

- ICカードを使っている、それからGISでドットで進められていますけれども、マイナンバー制を睨んだシステムになっておられるのでしょうか。

【講師】

- GISではそこまでやっていません。マイナンバー制自体はもっと違った種類の色々なデータが入ってくると思うので、情報の保護・保全という観点から、ちょっと我々には手を出せないところになり、今のところ触ってはいません。やり過ぎてはいけないと思っています。どこまで発展させるかということでは相当な可能性があります、これからのコンパクトシティ政策、さらに福祉・医療のもっと緻密な配置を考えたときには、このシステムは非常に有効です。

【メンバー】

- 福井の現状は、個別の利害関係が色々あったり、なかなか一本化していかない、方向性が定まらない。富山市の場合は、森市長、神田副市長が引っ張って行かれたのだと思えますが、まちづくりをしていくエンジンというか、そういったものはどんなふうにつくっていったのか、動き出せば動くと思うんですが、最初のところが中々一本化できないのかなと思うのですが、いかがでしょうか。

【講師】

- まちづくりも、行政も、小さな成功体験を積み上げていくことかなと思っています。役人というのは、あるものをそれだけやっていけば仕事になっていると思込んでいます。ところが、これから人口が減少する、本当に持続可能になるためには産業のみならず、色々な構造改革をしていかなければいけない時に、役人だけで仕事を進めるというのは問題があり、そのアンチテーゼが富山にあるということです。

福井はこれからがチャンスです。なぜ富山市にライトレールができたかという、新

幹線です。新幹線が来る、新幹線の導入スペースを空ける、そのために富山港線を何とかしなければいけないという時に、色々な議論が出たと聞いています。地域特性とオポチュニティの機会特性が非常に重要だと思っていますが、最大の機会特性の一つが新幹線なのだと思います。

福井では、これから新幹線が来るということですので、そのタイミングで動かなかつたらだめだと思います。富山の場合はライトレールがリーディングプロジェクト、最初の大きなプロジェクトでした。

福井の事情も若干存じ上げていますけれども、それをうまく組み上げていくことが大事だと思います。駅周辺の再開発は順番に動いているということですので、その成功体験を積み上げて、やればできるということを市あるいは県の職員が順番に身に付けていけば、富山以上のものができる可能性もあると思いますので、福井の地域特性を踏まえて、新幹線プラスアルファの機会特性を睨んで動かれるタイミングかなと思っています。

【座長】

- 本日は、富山市の神田副市长には大変すばらしいお話を伺いました。皆さんの御意見、副市长のお話を私なりにまとめさせていただきますと、文明というものは都市化に伴う、都市の発展には必ず都市計画が伴う。人口が増えつつあった時代にはそれなりの都市計画があり、そして、今、世界で類を見ない少子・高齢化、人口減少が始まっている時に都市はどうあるべきかが、コンパクトシティの元々の考えではないかと思っています。大事な点は、その地域の特性をきちんと捉えること。そして、優れたリーダーがおいになることだと思います。あちこちの成功体験を見て歩いても、見て歩いただけでは何にもならないとよく言われますが、大事なのは、その地域の特性を捉えることだと感じました。

もう一つ、農村あるいは過疎地はどうなるのかという話になります。ロンドンやパリ、あるいはサンフランシスコに行っても、あれだけ広い農村にほとんど人がいないのに農業が成立している。逆に、日本はどういうところへ行っても必ず農村があり、家がある。特に富山は山居村で、どうしてヨーロッパなどに比べてあんなにたくさん家があるのか、それはそれで生活が成り立ったからです。農業政策をいかにするか、昔は、段々畑、棚田で十分に自立できたということで、決して文化的に残そうとしたわけではなく必然性があった。そういうことをきちんと睨んでいくことが必要ではないか。やはりこの棚田などをどうするかということは、国土交通省あるいは環境省の話ではないかと思っています。

更に、どういう価値観をお互いが持てるか。皆が皆都会に住んで、それがハッピーというわけではないと思います。各々の価値観を持てるような、そういう教育を若い時からすることが非常に大事だと思います。

皆さんのお話を承っていると、そういうことが大事な、模索すべき方向性ではないかというふうに思います。

本日は、どうもありがとうございました。